女性にとっての“ふるさと”と定住願望（2）

武　田　　圭　太

問　題

今日、男女共に人生80年時代となった日本社会では、1回限りの生涯は自分自身の責任であることを受け容れ、過去を意味ある時間の蓄積として統合することが発達課題とされる高齢期（Erikson, 1959; 武田, 1993; 山本・ワップナー, 1992）の過ごし方がますます重要になってきた。これまでの人生を振り返りその価値と意義を見出せる人は、生涯の終焉近くになったとき、満足し安寧な気持ちでいられるだろう（武田, 1993; 和田, 1979, 1981）。

本稿では、高齢期の人生満足感を基準に、高齢者の人生への満足感に影響する日常生活の要因について検討する。現在60歳代の人たちは、第2次世界大戦敗戦後の1940～1950（昭和18～27）年代に生まれた世代であり、1960（昭和35～44）年代の高度経済成長期に、都市への人口移動を伴う産業構造の変化を経験している。こうした社会変動下にあって、山中の集落に住み続けてきた女性たちが本稿の主な分析対象である。

敗戦後しばらくの間は、戦前・戦中のイエや村落共同体にまつわる規範やしきたりなどが、人びとの行動や生活に影響していたようである（武田, 2008）が、中山間地の過疎化と高齢化が進む嫁ぎ先の集落の構成員として、雇用機会の均等や男女共同参画が叫ばれる今を、彼女たちはどのような思いで暮らしているのだろうか。夫の方が妻より年長という夫婦間の一般的な年齢差に加え、男性より平均寿命の長い女性が、夫のふるさとでどのように老後を過ごし、自身の人生を統合しようとしているのかについて考えるための手がかりを得ることが本稿の目的である。

方　法

調査対象　高齢化が進んだ過疎の山村で暮らす女性の代表として、愛知県北設楽郡T町Fに在住する18歳以上の女性を調査対象にした。2008（平成20）年1月1日現在で、調査地T町Fには200世帯の人たちが住んでいた。

調査方法　調査は、質問紙を使った留置法で行った。まず、調査票の質問内容についてT町役場の承認を得た後、調査地F内の各組長を経由し、組内の全ての世帯に配布してもらった。そして、調査票がほぼ全戸に配布された頃、各世帯を訪問して調査票を回収し同時に聴き取り調査を行った。

4日間で回収された164票の調査票は、無記入や誤記入など、回答が不備な8票を除く156票が有効だった（有効回収率95.12%）。

調査時期　原調査は、2008（平成20）年6月7～8日および14～15日に行った。

分析手続　本稿では、過疎化と高齢化が進んだ山村に住む女性が、暮らしについてどのような考えを持っているのか、また、これま

でとこれからの生活をどのように思い描きながら毎日暮らしているのかについて、次の変数を操作し検討する。

①生活環境の評価は、「あなたが住む地域は、交通、医療、自然など、生活環境は全般に良いと思いますか」に対して、「1＝良いと思う／2＝どちらかといえば良いと思う／3＝どちらかといえば良いと思わない／4＝良いと思わない／5＝よくわからない」から1つ選んでもらい、「4＝良いと思う／3＝どちらかといえば良いと思う／2＝どちらかといえば良いと思わない／1＝良いと思わない／0＝よくわからない」と逆転させて分析した。一部を除いて、他の変数も同様に処理した。

②生活環境の将来性は、「あなたが住む地域の生活環境は、将来、良くなると思いますか」に対して、「1＝良くなると思う／2＝どちらかといえば良くなると思う／3＝どちらかといえば良くなると思わない／4＝良くなると思わない／5＝よくわからない」から1つ選んでもらった。

③老後の不安は、「あなたは、ご自身の老後に不安を感じますか」に対して、「1＝不安を感じる／2＝どちらかといえば不安を感じる／3＝どちらかといえば不安を感じない／4＝不安を感じない／5＝よくわからない」から1つ選んでもらった。

④過疎対策の評価は、「あなたは、T町の過疎対策は充分だと思いますか」に対して、「1＝充分だと思う／2＝どちらかといえば充分だと思う／3＝どちらかといえば充分だと思わない／4＝充分だと思わない／5＝よくわからない」から1つ選んでもらった。

⑤食べ物の分け合いは、「隣近所で食べ物を分け合うことがありますか」に対して、「1＝分け合うことがある／2＝どちらかといえば分け合うことがある／3＝どちらかといえば分け合うことがない／4＝分け合うことがない／5＝よくわからない」から1つ選んでもらった。

⑥隣近所とのつき合いは、「あなたは、親しい人や隣近所の人とすごすことがありますか」に対して、「1＝よくすごす／2＝ときどきすごす／3＝あまりすごさない／4＝まったくすごさない／5＝よくわからない」から1つ選んでもらった。

⑦移住者の有無は、「最近、あなたの地域によそから引っ越してきた人がいますか」に対して、「1＝いる／2＝いない／3＝よくわからない」から1つ選んでもらった。⑧移住者への違和感は、「⑦で「1＝いる」と答えた方におたずねします。引っ越してきた人とのつき合いと、もともと地元に住む人たちとのつき合いに違いを感じますか」に対して、「1＝感じる／2＝どちらかといえば感じる／3＝どちらかといえば感じない／4＝感じない／5＝よくわからない」から1つ選んでもらった。

⑨地域外への外出は、「あなたは、あなたが住んでいる地域の外へ出かけることがありますか」に対して、「1＝よく出かける／2＝ときどき出かける／3＝あまり出かけない／4＝まったく出かけない／5＝よくわからない」から1つ選んでもらった。

⑩地元への好悪は、「あなたは、T町が好きですか」に対して、「1＝好きである／2＝どちらかといえば好きである／3＝どちらかといえば好きでない／4＝好きでない／5＝よくわからない」から1つ選んでもらった。

⑪都会に住みたい願望は、「あなたは、都会に住みたいと思いますか」に対して、「1＝都会に住みたい／2＝どちらかといえば都会に住みたい／3＝どちらかといえば都会に住みたくない／4＝都会に住みたくない／5＝よくわからない」から1つ選んでもらった。

⑫地域活動の苦役感は、「あなたは、地域で行う共同作業や役まわりが苦になりますか」に対して、「1＝苦になる／2＝どちらかといえば苦になる／3＝どちらかといえば苦にならない／4＝苦にならない／5＝よくわから

ない」から１つ選んでもらった。

⑬自己犠牲感は、「あなたは、自分自身を犠牲にしても、Ｔ町の人たちの幸福に少しでも貢献したいと思いますか」に対して、「1＝そう思う／2＝どちらかといえばそう思う／3＝どちらかといえばそう思わない／4＝そう思わない／5＝よくわからない」から１つ選んでもらった。

⑭自己抑制感は、「あなたは、Ｔ町の生活を維持するためには、自分自身の要求は我慢しようと思いますか」に対して、「1＝そう思う／2＝どちらかといえばそう思う／3＝どちらかといえばそう思わない／4＝そう思わない／5＝よくわからない」から１つ選んでもらった。

⑮義理やしきたりの必要性は、「あなたは、Ｔ町の生活を維持するためには、義理やしきたりは無くてはならないと思いますか」に対して、「1＝そう思う／2＝どちらかといえばそう思う／3＝どちらかといえばそう思わない／4＝そう思わない／5＝よくわからない」から１つ選んでもらった。

⑯老親を世話する子の責任は、「あなたは、親の老後のめんどうは子どもがみるべきだと思いますか」に対して、「1＝そう思う／2＝どちらかといえばそう思う／3＝どちらかといえばそう思わない／4＝そう思わない／5＝よくわからない」から１つ選んでもらった。

⑰伝統や習慣を守る責任は、「あなたは、伝統や習慣は尊重し守っていくべきだと思いますか」に対して、「1＝そう思う／2＝どちらかといえばそう思う／3＝どちらかといえばそう思わない／4＝そう思わない／5＝よくわからない」から１つ選んでもらった。

⑱定住願望は、「あなたは、これからもＴ町に住みたいですか」に対して、「1＝Ｔ町から離れずにずっと住みたい／2＝Ｔ町からしばらく離れて暮らした後で、戻ってきてずっと住みたい／3＝Ｔ町から離れて暮らしながら、ときどき戻ってきたい／4＝Ｔ町から離れたところで、戻らずにずっと暮らしたい」から１つ選んでもらった。

⑲人生満足感は、「あなたは、これまでの人生に満足していますか」に対して、「1＝満足している／2＝どちらかといえば満足している／3＝どちらかといえば満足していない／4＝満足していない／5＝よくわからない」から１つ選んでもらった。

その他に個人属性として、①年齢、②出生順位、③同居家族、④家の後継者（あととり）との同居、⑤家の後継者（あととり）の居住地、⑥就業状態、⑦生育地、⑧夫の生育地、⑨居住年数、⑩居住理由の10変数を扱う。

②出生順位は、「あなたは、長女ですか」に対して、「1＝はい／2＝いいえ」から１つ選んでもらいそのまま得点にした。

③同居家族は、既婚者と未婚者とに区別し回答してもらった。既婚者の場合、「既婚の方におたずねします。同居している家族は、あなたをふくめて何人ですか。（　　）人　あなたからみた同居家族」に対して、「1＝夫／2＝子ども／3＝孫／4＝あなた自身の父／5＝あなた自身の母／6＝夫の父／7＝夫の母／8＝あなた自身の祖父／9＝あなた自身の祖母／10＝夫の祖父／11＝夫の祖母／12＝あなた自身の兄弟姉妹／13＝夫の兄弟姉妹／14＝その他（具体的に　）」から１つ選んでもらった。未婚者の場合、「未婚の方におたずねします。同居している家族は、あなたをふくめて何人ですか。（　　）人　あなたからみた同居家族」に対して、「1＝父／2＝母／3＝兄弟姉妹／4＝父方の祖父／5＝父方の祖母／6＝母方の祖父／7＝母方の祖母／8＝兄弟姉妹の配偶者／9＝兄弟姉妹の子ども／10＝その他（具体的に　）」から１つ選んでもらった。

④家の後継者（あととり）との同居は、「あなたは、今、家の後継者（あととり）の人といっしょに住んでいますか」に対して、「1＝いっしょに住んでいる／2＝いっしょに住んでい

ない」から1つ選んでもらいそのまま得点にした。⑤家の後継者（あととり）の居住地は、「④で「2＝いっしょに住んでいない」と答えた方におたずねします。家の後継者（あととり）の人は、T町内の他の地域に住んでいますか」に対して、「1＝T町内の他の地域に住んでいる／2＝T町内の他の地域に住んでいない」から1つ選んでもらいそのまま得点にした。

⑥就業状態は、「働いている方におたずねします。あなたの仕事は、次のうちどれですか」に対して、「1＝自営業・家族従業者（農林漁業をふくむ）／2＝勤め人・常用雇用者／3＝勤め人・臨時、パート、アルバイト／4＝内職／5＝その他（具体的に　　）」から1つ選んでもらった。

⑦生育地は、「あなたが生まれ育ったのはどこですか」に対して、「1＝T町／2＝T町以外の愛知県内／3＝愛知県外」から1つ選んでもらった。⑧夫の生育地は、「既婚の方におたずねします。あなたの夫が生まれ育ったのはどこですか」に対して、「1＝T町／2＝T町以外の愛知県内／3＝愛知県外」から1つ選んでもらった。

⑨居住年数は、「あなたは、この地域に住み始めてどのくらい経ちますか」に対して、「1＝10年以内／2＝10年以上20年以内／3＝20年以上」から1つ選んでもらった。

⑩居住理由は、「既婚の方におたずねします。今、あなたがT町に住んでいる理由として、次のなかから最もあてはまるものを1つ選んで○をつけてください」に対して、「1＝夫と暮らすため／2＝夫の親が住んでいるため／3＝自分自身の親が住んでいるため／4＝家族が住んでいるため／5＝先祖代々の土地があるため／6＝所有する田畑や山があるため／7＝墓があるため／8＝家があるため／9＝夫が仕事を続けるため／10＝自分自身が仕事を続けるため／11＝旧友が住んでいるため／12＝その他（具体的に　　）」から1つ選んでもらった。

調査地に住む既婚女性（n = 156）の平均年齢は63.08歳（Me = 66.00, Mo = 76.00, SD = 14.47）と高齢である。60歳代になって、人生に満足できる人と満足できない人とでは、家族や地域生活に関する意識にどのような差異がみられるかを検討してみよう。

結果と考察

分析対象の基本属性　まず、基準変数とした人生満足感について、「よくわからない」と回答した12人を除外して、分析対象者数をn = 144とした。次に、人生満足感の回答が「1＝満足している」「2＝どちらかといえば満足している」の人たちを人生満足群（n = 105）、「3＝どちらかといえば満足していない」「4＝満足していない」の人たちを人生不満群（n = 39）に分けた。このように、全体の27.08％は自身の人生に満足していない。なお、分析対象（n = 144）の平均年齢は63.37歳（Me = 66.00, Mo = 76.00, SD = 14.50）である。また、前述したように、人生満足感の得点は逆転させて分析した。

最初に、人生満足感の個人差が、分析対象の基本属性と関係しているかを確認しておこう。分析対象者の生育地（表1）、配偶者、つま

表1　人生満足感と生育地との関係（n = 144）

（人・％）

	T町	T町以外の愛知県内	愛知県外
人生不満群（n = 39）	22（56.4）	14（35.9）	3（7.7）
人生満足群（n = 105）	51（48.6）	44（41.9）	10（9.5）

χ^2 = .705, df = 2, p = .703, ns

り、夫の生育地（表2）との関係には有意差はあらわれなかった。本人、配偶者共に、調査地T町で生まれ育った人が多く、T町以外の愛知県内を合わせると大半を占める。ただし、夫に比べ妻は、T町以外の愛知県内で生まれ育った人がやや多く含まれていることから、彼女らにはT町以外の余所に、自分自身のふるさとがあるのかもしれない。

表3は、居住年数別に集計した結果である。人生満足感の個人差によらず居住年数は全般的に長い。彼女たちの大半は、T町に定住していると思われる。また、家の後継者（あととり）との同居についてみたが、人生満足感との有意な関係は得られなかった（表4）。家の後継者（あととり）といっしょに住んでいない人が多いので、世帯の構成をみておこう。各世帯の同居家族数は、人生満足群が平均3.13人、人生不満群は2.92人で有意差はない。同居家族の内訳をみると、両群とも夫、子ども、夫の母が多い（表5）。同居家族数は本人を含む人数なので、配偶者である夫以外のもう1人の家族として、子か夫の母親のどちらかが同居している世帯が平均的な世帯構成と考えられる。

表2　人生満足感と夫の生育地との関係（$n = 144$）

（人・%）

	T町	T町以外の愛知県内	愛知県外
人生不満群（$n = 39$）	31（79.5）	6（15.4）	2（5.1）
人生満足群（$n = 105$）	85（81.0）	10（ 9.5）	10（9.5）

$\chi^2 = 1.546$, $df = 2$, $p = .462$, ns

表3　人生満足感と居住年数との関係（$n = 144$）

（人・%）

	10年以内	10年以上20年以内	20年以上
人生不満群（$n = 39$）	3（7.7）	3（ 7.7）	33（84.6）
人生満足群（$n = 105$）	7（6.7）	17（16.2）	81（77.1）

$\chi^2 = 1.722$, $df = 2$, $p = .423$, ns

表4　人生満足感と家の後継者（あととり）の同居との関係（$n = 144$）

（人・%）

	同居している	同居していない
人生不満群（$n = 39$）	10（25.6）	29（74.4）
人生満足群（$n = 105$）	37（35.2）	68（64.8）

$\chi^2 = 1.191$, $df = 1$, $p = .275$, ns

表5　人生満足感と同居家族（$n = 144$）

（人・%）

	夫	子ども	孫	自身の父	自身の母	夫の父	夫の母	自身の兄弟姉妹	夫の兄弟姉妹	その他
人生不満群（$n = 39$）	28（71.8）	15（38.5）	5（12.8）	2（5.1）	3（7.7）	2（ 5.1）	7（17.9）	0（0.0）	0（0.0）	8（20.5）
人生満足群（$n = 105$）	81（77.1）	37（35.2）	11（10.5）	1（1.0）	6（5.7）	13（12.4）	27（25.7）	1（1.0）	2（1.9）	14（13.3）

（注）複数回答である。

居住理由　長年暮らしているので住み慣れたとはいえ、山中の高齢者ばかりの集落に彼女たちが住み続けるのはなぜかという疑問は、高齢女性の生活観や人生観を知るうえで依然として本質的な問いかけといえよう。表６は居住理由の集計結果である。人生満足感の個人差にかかわらず「夫と暮らすため」「家があるため」が主な理由になっている。

しかし、注意深くみると、人生満足群に比べ人生不満群は、「夫と暮らすため」の比率がやや低く、「先祖代々の土地があるため」の比率が高い。また、少数ではあるが「墓があるため」と回答した人がいる。同じような傾向は、T町Fと似たような生活環境の静岡県浜松市Kで行った調査研究の結果にもあらわれた（武田, 2010）。世代間で継承されてきた土地や墓など、イエにかかわる事物や約束事に拘束され定住している高齢女性の実情を反映しているのかもしれない。

生活意識の差異　同じ集落に住み続けているのに過去の人生への満足感が異なる理由を、地元の生活意識に関するいくつかの変数について検討した結果、人生満足群と人生不満群との間には表７のような差異がみられた。生活環境の将来性や過疎対策の評価のように、個人では対処し難い生活環境をめぐる行政の諸施策への期待は両群共に低得点であるが、人生満足群より人生不満群の得点の低さが著しい。人生不満群は、生活環境の将来を悲観しているようである。また、生活環境の今後に期待できないという思いが、老後の不安をより感じさせるのだろう。

一方、集落内の日常の交流は、両群間に差異はなく比較的に肯定的な関係を形成しているようである。興味深いのは、人生不満群に比べて人生満足群は、地域外への外出に積極的な態度を示していることである。人生満足群は、地元地域内の閉じた人間関係だけで生活しているのではなく、地域の外へ積極的に出かけていくことによって、暮らしを刺激するように工夫しているのかもしれない。

また、地元を離れ都会に住みたい願望は両群間に有意差はなく、両群共に低得点である。しかし、地元に定住する願望は、人生不満群より人生満足群の方が有意に高い。このような人生満足群の強い定住願望は、「T町が好き」

表６　居住理由（$n = 144$）

（人・%）

	人生満足群	人生不満群
	($n = 105$)	($n = 39$)
夫と暮らすため	29（27.6）	8（20.5）
家があるため	24（22.9）	9（23.1）
家族が住んでいるため	12（11.4）	4（10.3）
先祖代々の土地があるため	12（11.4）	6（15.4）
その他	9（ 8.6）	6（15.4）
夫が仕事を続けるため	6（ 5.7）	0（ 0.0）
夫の親が住んでいるため	4（ 3.8）	1（ 2.6）
自分自身の親が住んでいるため	3（ 2.9）	1（ 2.6）
所有する田畑や山があるため	3（ 2.9）	1（ 2.6）
墓があるため	1（ 1.0）	3（ 7.7）
自分自身が仕事を続けるため	1（ 1.0）	0（ 0.0）
旧友が住んでいるため	1（ 1.0）	0（ 0.0）

表７　人生満足群と人生不満群との差異（$n = 144$）

	人生満足群（$n = 105$）		人生不満群（$n = 39$）	
	M	*SD*	*M*	*SD*
生活環境の評価	1.99	1.02	1.67	.93
生活環境の将来性	1.38	.73	.97	.49***
老後の不安	2.91	1.23	3.44	.88**
過疎対策の評価	1.29	.81	.90	.60**
食べ物の分け合い	3.21	.94	3.13	1.13
隣近所とのつき合い	2.80	.79	2.74	.97
地域外への外出	3.26	.64	2.79	.80***
地元への好悪	2.91	1.25	1.82	1.49***
都会に住みたい願望	1.48	.96	1.72	1.15
地域活動の苦役感	2.07	1.05	2.69	1.28**
自己犠牲感	1.80	1.35	1.21	1.20*
自己抑制感	2.03	1.33	1.51	1.41*
義理やしきたりの必要性	2.62	1.16	2.00	1.49*
老親を世話する子の責任	2.31	1.27	2.08	1.48
伝統や習慣を守る責任	2.78	1.12	2.03	1.48**
定住願望	3.69	.76	3.13	1.22**
年齢	62.54	14.79	65.59	13.61
出生順位	1.50	.50	1.62	.49
同居家族数	3.13	1.53	2.92	1.38

$^{*}p < .05$　$^{**}p < .01$　$^{***}p < .001$

という素直な感情にも有意な高得点としてあらわれている。これに対して、人生不満群は、どちらかといえばＴ町が好きではなく、都会ではない余所に住みたいと願っているようである。

どのような理由から、人生不満群はＴ町を好きになれないのだろうか。この疑問を考えるために、日常生活にまつわる規範や価値観に関する変数について両群を比較したところ、「地域活動の苦役感」「自己犠牲感」「自己抑制感」「義理やしきたりの必要性」「伝統や習慣を守る責任」に有意差がみられた。これらの結果から総じて、集落の共同体としての社会秩序を維持するために守られ共有されてきた人間関係のきまりやしきたりなどを肯定する態度を持っていると思われる人生満足群に対して、人生不満群はどちらかといえば否定的な態度であるといえよう。隣近所とのつき合いに限られた人間関係で暮らしているように思える人生不満群は、集落内の秩序づけから解放され自由に生活することを望んでいるのかもしれない。

人生満足感の規定因　最後に、人生満足感を規定する要因を特定するため、まず、生活意識に関する変数間の相関係数を求めた。表８によると、「過疎対策の評価」「食べ物の分け合い」「隣近所とのつき合い」「都会に住みたい願望」「老親を世話する子の責任」と人生満足感とは有意に相関していないので、これら５つの変数を除く残り11変数を独立変数とし、人生満足感を従属変数にして重回帰分析をした。

その結果、標準偏回帰係数βの値が高い「地域活動の苦役感」「地元への好悪」「地域外への外出」「老後の不安」が人生満足感を規定す

表８　人生満足感との相関関係（$n = 144$）

	M	*SD*	1	2	3	4	5	6
1. 人生満足感	2.84	.90	—					
2. 生活環境の評価	1.90	1.01	.184*	—				
3. 生活環境の将来性	1.27	.69	.205*	.199*	—			
4. 老後の不安	3.06	1.16	–.199*	–.145	–.158	—		
5. 過疎対策の評価	1.18	.77	.133	–.022	.300***	–.144	—	
6. 食べ物の分け合い	3.19	.99	.034	.152	.160	–.046	–.026	—
7. 隣近所とのつき合い	2.78	.84	.075	.274**	.174*	–.095	.050	.193*
8. 地域外への外出	3.13	.71	.263**	.018	.069	–.144	–.069	.123
9. 地元への好悪	2.62	1.40	.402***	.197	.108	–.013	.077	.239**
10. 都会に住みたい願望	1.54	1.02	–.134	–.092	–.071	–.008	–.108	–.095
11. 地域活動の苦役感	2.24	1.15	–.310***	–.089	.007	.069	–.080	–.089
12. 自己犠牲感	1.64	1.33	.232**	.188*	.198	–.068	.050	.105
13. 自己抑制感	1.89	1.37	.213*	.246**	.017	–.058	–.001	.057
14. 義理やしきたりの必要性	2.45	1.28	.190*	.007	.074	.124	.072	–.051
15. 老親を世話する子の責任	2.25	1.33	–.001	–.071	.070	–.099	.146	–.185
16. 伝統や習慣を守る責任	2.58	1.27	.174*	.044	.244**	.092	.115	.148
17. 定住願望	3.53	.94	.268**	.337***	.163	–.040	.049	.087

$^{*}p < .05$　$^{**}p < .01$　$^{***}p < .001$

表９　人生満足感を従属変数とする重回帰分析結果（$n = 144$）

独立変数	β	t
生活環境の評価	.014	.185
生活環境の将来性	.094	1.218
老後の不安	–.137	–1.857†
地域外への外出	.202	2.785**
定住願望	.105	1.278
地元への好悪	.267	3.238**
地域活動の苦役感	–.242	–3.321**
自己犠牲感	.054	.650
自己抑制感	.020	.239
義理やしきたりの必要性	.069	.850
伝統や習慣を守る責任	.052	.641
R	.593	
R^2	.351	
F	6.500***	

† $p < .10$　$^{**}p < .01$　$^{***}p < .001$

7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
—										
.118	—									
.168*	.100	—								
–.125	–.003	–.129	—							
–.056	.013	–.083	.184*	—						
.206*	.102	.185*	.016	–.104	—					
.150	.080	.346***	.064	–.068	.388***	—				
.006	.118	.217**	.052	–.073	.342***	.160	—			
–.052	–.006	–.020	–.080	.025	.059	–.019	.077	—		
.138	–.031	.224**	.033	–.080	.274**	.235**	.355***	.126	—	
.085	–.023	.348***	–.467***	–.209*	.072	.106**	–.074	.111	–.055	—

る要因と考えられる（表9）。特に、「地域で行う共同作業や役まわりが苦になる」という地域活動の苦役感は最も高い$-\beta$値を示し、表8からは、「都会に住みたい願望」と有意な正の相関、また、「定住願望」とは有意な負の相関がみられる。

これまで、過疎の集落で共同作業や役回りを務めて高齢期まで過ごしてきた女性のなかには、そうした活動に従事しなければならない生活から逃れ、都会に住みたいと願う人がいるのだろう。彼女たちは、老いを感じるようになって、人生の充実感や達成感や満足感を凌駕する不満な心理にとらわれているのかもしれない。このような高齢女性の情動は、キャリアの自由な選択という一般化された理念と、女性をとりまく日本の生活環境の現実との落差を考えるうえで重要な手がかりになると思われる。

引用文献

Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cycle.* Madison: International Universities Press.（西平 直・中島由恵 訳　2011 『アイデンティティとライフサイクル』 誠信書房）

武田圭太　1993 『生涯キャリア発達―職業生涯の転機と移行の連鎖―』 日本労働研究機構

武田圭太　2008 『ふるさとの誘因』 学文社

武田圭太　2011 「女性にとっての“ふるさと”と定住願望（1）」『愛知大学綜合郷土研究所紀要』56, 39–49.

和田修一　1979 「社会的老化と老化への適応―人生満足度尺度を中心として―」『社会老年学』11, 3–14.

和田修一　1981 「「人生満足度尺度」の分析」『社会老年学』14, 21–35.

山本多喜司・S. ワップナー 編著　1992 『人生移行の発達心理学』 北大路書房